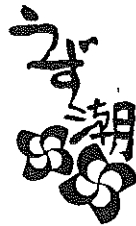


(第3種郵便物認可)

ある村の共有地。共有地には牧草があり誰でもそこで羊を飼うことができる。人々ではできるだけ多くの羊をそこに入れ、自らの利益を上げようとする。その結果、牧草地は荒廃してしまい、誰も羊を飼うことができなくなり、最終的に牧草地を放棄しなくてはならなくなる。一九六八年、米国の生物学者ギャレット・ハーディンが科学雑誌『サイエンス』に発表した論文によって有名になった「コモンスの悲劇」と呼ばれる寓話(ぐうわ)である。

もう一つの話は飛行機の整備工場が舞台。はしごに乗って翼のリベットを引き抜く仕事をしている男がいる。「いったい何をしたい



やまもと たろう  
山本 太郎

寓話からの字づ

るのかと、あなたは尋ねる。「航空会社は、このリベットが一つ二つで売れることに気づいたんですよ」と男が答える。「でもそんな

ことをして、取り返しがつかないほど翼が弱くならないとどうしてわかるのですか?」「心配はいりません。飛行機は必要以上に強くつくってあることは確かだし、現に、翼はまだ胴体から外れていないじゃありませんか。リベット一つにつき、私には、五十枚の手数料が入るのです」「気は確かですか?」「心配なさらないでよいと

いることくらいわかっています。実際問題として、私もこのフライトで飛ぶことになっているんです。だからあなたもまったく心配

する必要はないのです」

なぜ、こうした寓話が繰り返されるのか。地球環境問題の多くがこの牧草地のあり方に直結しているからであろう。コモンスは、水資源であり、山林、河川、湖であり、大気であり、その中の酸素であり、海洋であったりする。そして多様な生物の生存そのものもコモンスといえるかもしれない。それを知りつつ、行為をやめようとなし「リベット抜き」に私たち自身の姿を見るからであろうか。自然は、親(前)世代からの遺産ではなく、子(次)世代からの借り物である。寓話の教訓もこのあたりにあるのかもしれない。(長崎大熱帯医学研究所教授)